

## ジャイナ教は行為をどう考えるのか？

堀田和義

### 業と苦行

ジャイナ教の教えは、自分が行った善悪の行為の結果は、必ず自分自身が引き受けるという自業自得の法則に貫かれている。この点は仏教などでも同様であるが、細かい点では多くの相違があり、とりわけ苦行に関する見解は大きく異なると言われる。

今回は、ジャイナ教の業や苦行に関する考え方を、仏教と比較しながら紹介することにした。

### 業という語の二つの意味

ジャイナ教や仏教で「業」と呼ばれているものは、サンスクリット語で「カルマン」(プラークリット語では「カンマ」と言い、英語の辞書にも登録されている。ジャイナ教において、この語には主として次の二つの意味がある。

一つ目は、身体・言葉・心の三つを通じて行われる行為である。これは仏教で言うところの「身口意の三業」である。二つ目は、身体・言葉・心の行為の結果として漏入し、靈魂を束縛する微細な物質である。以下、本稿で業と言った場合には、後者を意味す

る。

この物質には善業と悪業の二種類があり、良い行為をすれば善業、悪い行為をすれば悪業が漏入する。そして、これらの業は一定期間にわたって靈魂を束縛し、善業は樂を、悪業は苦をもたらした後に消滅する。こうして自業自得が完成する。現代日本語の「自業自得」では、悪い行為の結果として苦しみをもたらされるというニュアンスが強いが、本来は良い行為の結果として樂をもたらされることも含んでいる。

ジャイナ教では行為の結果として漏入する業を物質的なものと考え、仏教では潜在的な力と考える。インドの宗教全体ではどうかと言うと、仏教のような考え方が多数派である。ジャイナ教のように、業を物質的なものと考える立場は極めて少なく、ジャイナ教以外ではヒンドゥー教のシヴァ派にしか見られない。

### ジャイナ教の八種の業

ジャイナ教の業の体系は非常に複雑であり、ここでそのすべて



# 法然上人の信仰とその深まり

丸山博正 著 信ずべきものは何か、信じられているものは何か

法然上人の信仰と宗教体験を自身の阿弥陀仏と極楽浄土への信仰にかさね、語録、念仏思想、後世の信仰の展開を読み解くことによつて

「阿弥陀仏の本願」にたどる論攷集 A5上箱・布クロス装・定価一八〇〇〇円＋税

教授 丸山博正 著  
名論 念仏 珠記 憲寿 小澤頌

## と教 浄土教

浄土教学、法然の釈尊観、インド仏教、写本研究、近現代の宗教問題、さらに真言密教など多岐にわたる38論考を収録

A5上箱・本体23,000円＋税

図書出版 **ノンブル社**

東京都新宿区西早稲田 1-8-22-2F  
Tel.03-3203-3357 Fax.03-3203-2156  
http://www.nonburusha.co.jp/

を論じることはできない。そこで、以下においては、最も重要と考えられる八種の業を紹介する。八種の業というのは、すなわち、(一) 観照を覆う業、(二) 認識を覆う業、(三) 感受を決定する業、(四) 迷いをもたらす業、(五) 寿命を決定する業、(六) 個性を決定する業、(七) 種姓を決定する業、(八) 妨害する業の八つである。これらの各業にはさらなる下位分類があり、最終的には百五十八種にも及ぶ。

(一) は、靈魂が本来的に備えている観照(対象を漠然と把握する精神作用)を覆うものであり、(二) は、靈魂が本来的に備えている認識(対象を詳細に把握する精神作用)を覆うものである。そして、(三) は苦楽の感受を決定するもの、(四) は正しい見解と行いに関する迷いをもたらすもの、(五) は身体の寿命、および神・人間・動植物・地獄の住者のいづれに生まれるかを決定するもの、(六) は個人の様々な要素を決定するもの、(七) は家柄などの環境を決定するもの、(八) は靈魂の能力を妨げるものである。以上のような業の様々な組み合わせによつて、それぞれの生

き物が形作られる。

これら八種のうち、(一) (四) は破壊的な業、(五) (八) は非破壊的な業と呼ばれる。この破壊的・非破壊的の区別は、ジャイナ教の三宝(正しい見解・正しい認識・正しい行い)の獲得を妨げるか否かという、靈魂に与える影響の違いに基づいている。

### 業の漏入と業の減尽というプロセス

第五回で紹介したように、ジャイナ教では「靈魂、非靈魂、業の漏入、業による束縛、業の遮断、業の減尽、解脱」という七つの真実によつて解脱へ至る過程を示している。これらのうち、業論に大きくかわるのは、業の漏入と業の減尽までの四つである。ジャイナ教では、「行為」という言葉は、業の漏入と同義語とされる。身体・言葉・心の行為によつて、善業・悪業が否応なく漏入するからである。そして、その結果、業によつて靈魂が束縛され、本来備えている力を発揮できなくなるため、輪廻をさまよ

うことになる。このように業によって束縛された靈魂が解脱するには、業の遮断と業の減尽が必要となる。

業の遮断というのは、新たな業の漏入を止めることである。この遮断には、規律と用心が有効であるとされる。規律とは、身体・言葉・心の行為を制御することである。一方、用心とは、生き物に危害を加えないためのものであり、状況に応じて、歩行に関する用心、発話に関する用心、托鉢に関する用心、取ることに置くことに關する用心、排泄に関する用心という五つに分けられる。この「遮断」に相当する言葉は初期仏典にも見られ、漢訳仏典では「律儀」などと訳されている。ただし仏教では、業の漏入の遮断ではなく、悪いことをしないように抑制・防護することを意味する。

業の遮断によって新たな業の漏入を止めても、すでに漏入した業を減ぼさなければ、解脱できない。そこで必要になるのが業の減尽である。先述したように、業は一定期間にわたって靈魂を束縛し、楽や苦といった結果をもたらした後に消滅する。しかし、自然に結果が生じるのを待っていたのでは、なかなか業を減ぼすことができない。そこで要請されるのが苦行である。苦行の実践により自らに苦しみを与えれば、自然に結果が生じるのを待つこととなく、人為的に業（主に悪業）を減ぼすことが可能となる。

### ジャイナ教と苦行

ジャイナ教では苦行が重視されるといふことがしばしば強調されるが、それには開祖マハーヴィーラが苦行によって悟りを開い

たことが影響している。一方、仏教の開祖ブッダも六年間にわたる激しい苦行を実践した。しかしながら、ブッダの場合は苦行が無意味であると考えて、最終的には苦行を放棄した。その考え方は、快樂と苦行という両極端を離れるという意味で「中道」と呼ばれ、ブッダの悟りへつながったとされる。

ジャイナ教では、たしかに、見るからに痛そうな「ケーシヤロインチャ（毛を抜くこと）」などと呼ばれる苦行が実践されている。ジャイナ教では刃物を使用することが禁止されているため、出家修行者は年に数回、自分の手で頭髮や髭などを引き抜くのである。これには、マハーヴィーラが出家の際に自らの手で頭髮を引き抜いたという伝説も影響しているだろう。しかし、これを除けば、苦行と言っても断食が主なものであり、ヒンドゥー教の一部の行者たちが実践しているような激しい苦行（例えば、太陽を見つめ続ける、何年も片腕を上げたままにする、地面を転がりながら聖地巡礼をする等々）は見られない。

また、『真実の意味を理解するための経』というジャイナ教の綱要書では、苦行は内的苦行と外的苦行の二種に分けられ、前者としては、懺悔、表敬、奉仕、学習、身体の放捨、瞑想が、後者としては、断食、減食、食物の一定制限、美味の放棄、人里離れた場所での滞在、身体的苦痛が挙げられている。

これらを見る限り、我々が「苦行」という言葉で真っ先にイメージするようなものに近いのは、外的苦行に含まれる身体的苦痛のみである。そして、内的苦行に含まれるのは、学習や瞑想などといった苦行らしからぬものばかりである。

## ジャイナ教の頭陀

ジャイナ教聖典では、苦行に関する記述の中に「塵などを振り払う」を意味する動詞に由来する語が見られるが、これに相当する言葉は初期仏典にも見られる。漢訳仏典で「頭陀<sup>ずだ</sup>」などと音写され、現代日本語の「頭陀袋」という言葉にも残っているものがそれである。これまで多くの研究者がジャイナ教聖典と初期仏典の頭陀行に関する比較を行ってきた結果、様々なことが明らかになった。

まず、ジャイナ教聖典の用例のほとんどが、苦行によって業を振り払うとすののに対し、初期仏典では（苦行などとは関係なく）煩惱やそれを象徴する悪魔などを振り払うとしている。また、ジャイナ教では、頭陀の教えが体系化されることはなかったが、仏教においては糞掃衣<sup>こんそうえ</sup>を着用する、もっぱら托鉢をする、人里離れた場所に滞在するなどといった、衣食住に関する十三の修行法として体系化された。

## 「苦行」をめぐる問題点

以上のことから、次のようなことが言えるだろう。「苦行」と訳されるサンスクリット語「タパス」は、その言葉が持つ意味的な広がりや考慮して、新たな訳語を検討する必要がある。ジャイナ教の分類に従うならば、瞑想を行う仏教も苦行を実践していることになってしまふからである。また、苦行を認めないとされる仏教でも、頭陀という修行法がその代替物とでも言うべき位置を

占めており、頭陀の中に苦行的な要素を見出すことも可能である。そのように考えると、「ジャイナ教が苦行を重視し、仏教が苦行を否定した」という単純な図式に関しても見直す必要があるだろう。そもそも、「何が苦であるのか」という基準には客観性がないため、苦行を定義すること自体が困難を伴っている。

また、仏教の中道という考え方にも大きな問題がある。というのも、「これが中道である」という見解は、その両極端の存在を前提としているからである。そして、その両極端を設定しているのは中道を説いている者自身であるため、必ずしも客観的なものとは言えない。このことは、第二回で紹介したジャイナ教の「非極端説」という考え方にも当てはまる。

第八回では、ジャイナ教の生命観に焦点を当て、仏教などと比較しながら、生き物の分類などを紹介したい。

# 春 秋

Shunjū  
2016  
10

**新連載** 明治天皇崩御と国家神道の新たな展開  
大正・昭和前期の宗教と社会 ① 島 蘭 進 1

「サーカス」について—「サーカス学校」によせて 奥井 遼 5

モーツァルトの青春 断想 ③ 塩山千仞 9

**新連載** 〈兆し〉としての風 インド〈風〉曼荼羅 ① 高橋 明 12

中村元— 熱情と思惟 (4) 若松英輔 16

世界宗教におけるキリスト教の位置 (4) 完  
— 死によって実現しなかったオックスフォード大学での講演原稿  
エルンスト・トレルチ / 深井智朗 訳 20

老子の〈汎靈論〉的生命  
〈いのち〉でたどる東洋思想 ⑥ 小倉紀蔵 24

ジャイナ教は行為をどう考えるのか?  
— 業と苦行 ジャイナ教と仏教 ⑦ 堀田和義 28

**京都十景** ⑦ 出雲の阿国が傾く 鳥居本幸代